

春の日は乱れし裾すその上げ端はしに
桜の風ぞ残り香かうれし

令和七年四月三日

大中臣正比呂



陽光ひかり 寄せ来る春の日は、命の復活が生じる日でもある。
顔を埋めた胸の中、寂さみしさ溶けて泉となせり。

諸兄しよけいよ集え。

思い確かに青春の、城下で交わす旨酒うまざけを分けし徳利は首細とくりし。
その細首の君なれば、肩抱き寄せて口づけ交かわす。

今ぞその時、若芽わかめの頃は。